

二〇〇二年八月一日

聖なるものであること（九三）

ヨハネの福音書一五章一節―一六節

きょうも、ヨハネの福音書一五章一節―一六節に記されています、ぶどうの木とその枝のたとえによる、イエス・キリストの教えについてお話ししたいと思います。

きょう、特に注目したいのは、九節―一節に、

父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。わたしの愛の中にとどまりなさい。もし、あなたがたがわたしの戒めを守るなら、あなたがたはわたしの愛にとどまるのです。それは、わたしがわたしの父の戒めを守って、わたしの父の愛の中にとどまっているのと同じです。わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにある、あなたがたの喜びが満たされるためです。

と記されているイエス・キリストの教えの中の、九節の、

父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。わたしの愛の中にとどまりなさい。

という教えです。

ここでイエス・キリストは、

わたしの愛の中にとどまりなさい。

と戒めておられます。

これと同じような戒めは、四節にも記されていて、

わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。

と言われています。四節では、これに続いて、

枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。

と述べられています。

一節―一六節に記されているイエス・キリストの教えの全体が、「ぶどうの木」とその「枝」のたとえをもって語られているということからしますと、四

節に記されている、

わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。

という戒めが、ここに記されているイエス・キリストの教えの最も基本的な戒めであると考えられます。そして、この、イエス・キリストのうちにとどまるという、基本的な戒めが与えられたのは、これに続いて、

枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。

と言われていることから分かりますように、私たちが実を結ぶようになるためです。それは、一節で、

わたしはまことのぶどうの木であり、わたしの父は農夫です。

と言われていますように、「まことのぶどうの木」として、父なる神さまのみこころになが実を結ばれるイエス・キリストに結び合わされた「枝」として、私たちも、実を結ぶようになるということなのです。

すでにお話ししましたように、この、

わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。

という基本的な戒めは、これに先立って、三節で、

あなたがたは、わたしがあなたがたに話したことばによって、もうきよいのです。

と言われていることを受けています。

あなたがたは、わたしがあなたがたに話したことばによって、もうきよいのです。

というイエス・キリストの言葉は、戒めではなく宣言です。この「わたしがあなたがたに話したことば」の「ことば」(ホ・ロゴス)は、イエス・キリストの教えを表わしています。この「ことば」は単数形で、イエス・キリストが語ってくださった教えの全体が一つのまとまりをもっていることが示されています。イエス・キリストの教えは、ご自身がどのような方であるかということと、ご自身が遂行なさる贖いの御業についての教えであるということ、いわば、主題的なまとまりをもっているのです。

ですから、三節では、そのようなまとまりをもっているイエス・キリストの「ことば」を聞いて、その「ことば」によってあかしされているイエス・キリストと、イエス・キリストが遂行される贖いの御業を信じて、自らをイエス・

キリストにお委ねした者は、イエス・キリストがご自身の血によって確立してくださった新しい契約の民としていただいているということ——ここでのたとえを用いて言いますと、「まことのぶどうの木」に結び合わされた「枝」となっているということが語られています。

三節では、イエス・キリストが、弟子たちは、ご自身の「ことば」に基づいて、ご自身を信じているということを確認されたので、弟子たちに、

あなたがたは、わたしがあなたがたに話したことばによって、もうきよいのです。

と宣言しておられます。

この点は、私たちの場合も同じです。イエス・キリストが語ってくださいました「ことば」は、イエス・キリストの契約の言葉ですが、それは、私たちにとっては福音の御言葉として、新約聖書にまとめられています。私たちが、その「ことば」にしたがって、イエス・キリストが永遠の神の御子であられることと、その永遠の神の御子が私たちの罪を贖ってくださいるために、私たちと同じ人の性質を取って来てくださり、私たちの身代わりになって十字架の上で、私たちの罪に対するさばきを負って死んでくださったこと、そして、私たちを新しいいのちに生かしてくださいるためによりみがえってくださいることを信じたときに、イエス・キリストは、

あなたがたは、わたしがあなたがたに話したことばによって、もうきよいのです。

と宣言してくださっています。

そして、このことの上に立って、四節の、

わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。

という戒めと約束が語られています。

*

九節に記されている、

わたしの愛の中にとどまりなさい。

という戒めは、四節に記されている、

わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。

という戒めと約束を別の面から言い換えたものです。

わたしの愛の中にとどまりなさい。

という戒めは、それに先立って語られている、

父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。

ということを踏まえて与えられています。それは、四節の、

わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。

という戒めが、三節に記されている、

あなたがたは、わたしがあなたがたに話したことばによって、もうきよいのです。

という宣言を踏まえて語られているのと同じです。

父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。

というイエス・キリストの言葉も、戒めではなく、イエス・キリストが、すでに、私たちに対してなさってくださいていることを述べているものです。

この、

父がわたしを愛されたように

の「愛された」という言葉は（不定過去形で表わされていて）、父なる神さまが完全な愛によって御子イエス・キリストを愛しておられることを表わしていると考えられます。そして、

わたしもあなたがたを愛しました。

ということも、これと同じ言葉で表わされています。イエス・キリストは、決して変わることがない、完全な愛をもって、私たちを愛してくださいましたし、愛してくださいています。一三節には、

人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。

と記されています。イエス・キリストは、まさに、そのような愛によって私たちを愛してくださいました。

ガラテヤ人への手紙二章二〇節後半には、

いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によるのです。

というパウロの告白が記されています。

これは二〇節後半に記されていますが、前半では、

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。

と言われています。そして、これに続く、後半の、

いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨て

になった神の御子を信じる信仰によっているのです。

という言葉では、前半の「キリスト」が「神の御子」と言い換えられています。ですから、

私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子

という言葉には、「私を愛し私のためにご自身をお捨てになった」方は、なんと「神の御子」であられる、という思いが込められています。

また、ヨハネの手紙第一・三章一六節には、

キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。

と記されています。

ここで、ヨハネは、

それによって私たちに愛がわかったのです。

と書いています。ということは、それまでは「愛」が分からなかったということです。もちろん、私たちは、イエス・キリストが私たちのために十字架にかかっていのちを捨ててくださったことを信じる前にも愛を知っていました。しかし、それは、罪の自己中心性に縛られている私たちのうちから生まれた愛です。そのような私たちが考えていた愛です。イエス・キリストが私たちのために十字架にかかっていのちを捨ててくださったことに現われた愛は、そのような私たちの思いをはるかに越えた愛です。

たとえば、私たちは、私たちのために十字架にかかっていのちを捨ててくださったイエス・キリストを信じたときにどう思ったでしょうか。それまで、イエス・キリストのことを勝手に考えていたけれど、福音の御言葉にあかじかれているイエス・キリストは、そして、私たちが信じたイエス・キリストは、かつて自分が考えていたイエス・キリストとは、まったく違う方であると感じています。そして、それまではイエス・キリストのことを知らなかったと断言はできません。それと同じことは、私たちに對するイエス・キリストの愛についても言うことができます。

私たちは、そのイエス・キリストの愛をどのようにして知ったのでしょうか。

それは、十字架につけられたイエス・キリストのことを、イエス・キリストが語ってくださった「ことば」、すなわち、福音の御言葉をとおして知ったことによつてです。それだけではありません、私たちは、イエス・キリストを信じたことによつて、イエス・キリストが成し遂げてくださった罪の贖いにあず

かり、罪と死の力から解放していただき、イエス・キリストの復活のいのちによって生かしていただいています。それによって始まったイエス・キリストとの愛にあるいのちの交わりの中で、イエス・キリストを知るようになることによつて、その愛が分かるようになったのです。私たちは、イエス・キリストの愛によつて生かされている中で、イエス・キリストの愛を知るようにになりました。

そして、イエス・キリストが私たちのために十字架にかかっているのを捨ててくださったことに現われた愛を知ったときに、それまでは愛というものを知らなかったと言うほかはないことも分かったのです。

*

このように、ヨハネの福音書一五章九節に記されている、

わたしの愛の中にとどまりなさい。
というイエス・キリストの戒めは、

父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。

という、イエス・キリストが私たちを変わることがない完全な愛をもつて愛してくださっていることを踏まえて与えられています。

それは、先ほどお話ししましたように、イエス・キリストの語ってくださいました「ことば」を信じたことによつて、「まことのぶどうの木」であるイエス・キリストにつながられている「枝」として、イエス・キリストのうちにとどまるといふことを言い換えたものです。四節で、「ぶどうの木」とその「枝」のたとえによつて、イエス・キリストにとどまることが語られているのは、「枝」は「ぶどうの木」につながっていないなければ枯れてしまうし、「ぶどうの木」につながつて、そのいのちによつて生かされていて初めて、実を結ぶことができます。この九節で、父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。わたしの愛の中にとどまりなさい。

と言われているのは、その「いのちの関係」が「愛の関係」であることが示されています。

「いのちの関係」を示すのには、「ぶどうの木」とその「枝」のたとえが有効です。しかし、九節に記されている「愛の関係」は、「ぶどうの木」とその「枝」のたとえでは十分に表わすことはできません。この「愛の関係」においては、私たちが「神のかたち」に造られていて、自由な意志をもっている人格

的な存在であることが前面に出てきています。それが、一〇節の、

もし、あなたがたがわたしの戒めを守るなら、あなたがたはわたしの愛にとどまるのです。それは、わたしがわたしの父の戒めを守って、わたしの父の愛の中にとどまっているのと同じです。

というイエス・キリストの言葉に反映しています。

私たちは、私たちの主であるイエス・キリストが、一方的な愛と恵みによって、私たちを贖いにあずかせてくださって、罪をきよめてくださり、私たちを内側から新しく造り変えて、ご自身の契約の民としてくださったので、イエス・キリストのうちにとどまるのです。それは、結婚によって結ばれた男女が、結婚によって夫と妻になったので、夫として、また妻としての関係の中にとどまっているのと同じです。そして、二人が夫と妻の関係にとどまっているということは、愛によって、自分を与え合い、思いを一つにして歩みをとにもするということに現われてきます。

私たちがイエス・キリストの愛のうちにとどまるということも、それと同じです。イエス・キリストは、愛によって、私たちにご自身のいのちを与えてくださいました。私たちの罪を贖ってくださいるために、十字架にかかって死んでくださいました。そして、栄光を受けて死者の中からよみがえってくださったことよって、私たちのいのちの源となってくださいました。それは、今から二千年前のことですが、そのことよって表わされた、私たちに對するイエス・キリストの愛は、今日も変わっていません。

今日、私たちに、

父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。わたしの愛の中にとどまりなさい。

と言われるのは、栄光を受けて死者の中からよみがえってくださったイエス・キリストです。私たちは、御霊のお働きによつて、このイエス・キリストに結び合わされて、イエス・キリストの復活のいのちによつて生かされています。そのように、イエス・キリストは、私たちにご自身のいのちを与えてくださいました。また、今も、私たちをご自身のいのちによつて生かしてくださいます。

そうであれば、私たちがなすべきことは、イエス・キリストが十字架の上でご自身のいのちをささげてくださいって成し遂げてくださった贖いにあずかって、罪をきよめていただくことであるとともに、イエス・キリストの復活のいのち

によって、愛のうちに生きることです。それが、イエス・キリストの愛のうちにとどまることの中心です。

*

繰り返しになりますが、九節では、

わたしの愛の中にとどまりなさい。

と戒められています。それは、

父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。

という事実を踏まえて語られています。ですから、イエス・キリストの愛のうちにとどまるためには、イエス・キリストが私たちを愛してくださいました。愛を受け止めて、私たちも愛をもって応答することが必要です。そのことについては、今お話ししたとおりです。

それとともに、九節では、ただ単に、

わたしはあなたがたを愛しました。

と言われているのではなく、

父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。

と言われています。

これは、父なる神さまと御子イエス・キリストの間で通わされている愛が、私たちの契約の主であられるイエス・キリストと私たちの間の愛のモデルであるということの意味しています。このことも、続く一〇節において、

もし、あなたがたがわたしの戒めを守るなら、あなたがたはわたしの愛にとどまるのです。それは、わたしがわたしの父の戒めを守って、わたしの父の愛の中にとどまっているのと同じです。

と言われていることに反映しています。

このように、九節、一〇節では、父なる神さまと御子イエス・キリストの間の愛が、御子イエス・キリストと私たちの間の愛のモデルであるということが示されています。それは、逆に言いますと、神さまが、その愛によって備えてくださり、御子イエス・キリストによって成し遂げてくださった贖いの御業にあずかって、罪をきよめられ、復活のいのちによって生かされて生きている者たちのうちに生み出される愛は、実に、三位一体の神さまの、父なる神さまと御子の愛を映し出すものであるということの意味しているのです。

それは、驚くべきことですが、御言葉の教えにしたがって考えますと、当然であるとも言えます。

ヨハネの手紙第一・四章七節、八節には、

愛する者たち。私たちは、互いに愛し合いましょ。愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。

と記されています。

ここでは、

愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。

と書かれています。もちろん、この愛は、先ほど引用しました、同じ手紙の三章一六節で、

キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。

と書かれています。実際、四章では、これに続く九節、一〇節において、神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。と書かれています。

この二つの御言葉を合わせて読みますと、私たちのためにご自身のいのちをお捨てになったイエス・キリストの愛において、父なる神さまの愛が最も豊かにかかされているということが分かります。

そして、先ほど引用しました三章一六節の後半も含めて引用しますと、そこには、

キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。

と記されています。

また、四章九節、一〇節で、

神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。

と言われているのを受けて、一節、一二節では、

愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださいましたのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです。いまだかつて、だれも神を見た者はありません。もし私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにおられ、神の愛が私たちのうちに全うされるのです。と言われています。

私たちのためにご自身のいのちをお捨てになつたイエス・キリストの愛において、父なる神さまの愛が最も豊かにあかしされているということは、説明するまでもありません。ヨハネの手紙第一で示されているのは、それだけではなく、私たちも、神さまが愛であられることをあかしする愛に生きるものとされているということです。そのことは、

ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。とか、

愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださいましたのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです。

というように、戒めの形で示されていますが、それは、愛のない者に向かつて愛を求めるのは違います。イエス・キリストが十字架の上でご自身のちをさげてくださって成し遂げてくださった贖いにあずかって、罪をきよめていただくとともに、イエス・キリストの復活のいのちによって生きるようになっていただいた者のうちに、御霊が本当の愛を回復してくださいているということが踏まえられています。

ガラテヤ人への手紙五章一二節、二三節には、

御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。と記されています。これは、私たちをイエス・キリストの十字架の死と死者の中からのよみがえりに基づいて新しく造り変えてくださった御霊が、私たちのうちに結んでくださる実のことを述べています。

この「御霊の实」は単数形で、「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」が全体としてのまとまりをもっていることを示しています。その意味で、「御霊の实」は、御霊によつて新しく造り変えていただいた者の人格的な特性としてのまとまりをもっています。そして、その全体的なまとまりをもって「御霊の实」を特徴づけているのが、最初に挙げられている愛であると考えられます。その愛の中で、「喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、

柔和、自制」が生み出されるということです。

それで、

ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。

という戒めや、

愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくださったのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです。

という戒めは、ただ単に、イエス・キリストの愛や父なる神さまの愛に倣うということではなく、御霊が私たちのうちに生み出してくださっている愛を、具体的な形で現わすように求めているのです。

そして、私たちが、そのような、お互いの愛に生きるようになるための土台、また、出発点は、イエス・キリストが、

父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。わたしの愛の中にとどまりなさい。

と戒めておられるように、イエス・キリストの変わることはない完全な愛のうちにとどまって生きることです。

ヨハネの福音書一五章一二節で、イエス・キリストは、

わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです。

と述べておられます。これは、実質的に、私たちが互いに愛し合うようにとの戒めですが、これも九節の、

父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。わたしの愛の中にとどまりなさい。

という戒めを踏まえて語られています。

イエス・キリストの血による贖いにあずかって、イエス・キリストの契約の民とされている者たちは、主であるイエス・キリストの、変わることはない完全な愛のうちにとどまることによって、そして、イエス・キリストの愛のうちにとどまることの中で、互いに愛し合うようになります。